

ピエール・コルネイユの作品に見る愛情の心理学

村 瀬 延 哉

(1)

スタロピンスキーは『偽名家スタンダール』の中で、次のように書いている。

Stendhal, comme tous les timides, imagine que les femmes ne se rendent que devant un déploiement de qualités extraordinaires; l'amour lui semble devoir être mérité de haute lutte.¹⁾

(すべての内気な男達のように、スタンダールは、女性とは男が人並優れたところを示さぬ限り、なびいてこないものだと想像していた。女性の愛に値するには、戦いとることが必要だと思えたのである。)

スタンダールが、その作品をこよなく愛したコルネイユについても、スタロピンスキーのこの言葉があてはまるだろうか。スタンダールが一世紀以上の時間的差異を越えてコルネイユを好んだについては、それ相応の理由、つまり両者の間にある種の精神的類似性が存在したということか。

実際コルネイユの劇では、女性が抜きん出た能力を示した男性に与えられる勝利の報酬の如きものとして描かれる例に、事欠かない。その典型的例が、主人公が武勲によって、恋人シメーヌを眩惑し続ける『ル・シッド』であろう。

父親の恥をそそぐため、シメーヌの父を決闘で殺したロドリーグは、「シメーヌにふさわしい価値ある男」という観念を持ち出して、父親殺しの正当化を試みる。

Et ta beauté sans doute emportait la balance, / Si je n'eusse opposé
contre tous tes appas / Qu'un homme sans honneur ne te méritait pas,

/ Qu'après (……) / Qui m'aima généreux me haïrait infâme,²⁾

(あなたの魅力に抗して、名誉を失った男はあなたに値しない、気高い心の私を愛して下さった方も、恥にまみれた私なら憎まれる(…)
と考えなかったら、疑いもなくあなたの美しさが勝ちを取めるところ
でした。)

一方、シメーヌも、四幕で、結婚が不可能となったかつての恋人が、彼の父の名誉を守っただけでなく、ムーア人を撃退して国民的英雄になったのを知ると、思わず嘆きの叫びを上げる。

Ah cruels déplaisirs à l'esprit d'une amante! / Plus j'apprends son mérite et plus mon feu s'augmente;³⁾

(あー、恋する女の心には何と酷い苦しみでしょう! 彼の値うちを知れば知るほど、恋の炎はますます燃え上がるのです。)

そして、勝者がシメーヌの夫となることを約束された決闘で、彼女の代理戦士を打ち破って生還するようロドリグに求めて、図らずも彼女が勝者の報酬となることを望んでいると認める。

Sors vainqueur d'un combat dont Chimène est le prix.⁴⁾

(シメーヌが賭けられているこの勝負に、勝ってお戻り下さい。)

同じことが、『シンナ』の女主人公エミリーにも起る。エミリーの父は、彼女の幼い頃、皇帝オーギュストが政権を奪取する過程で、彼により死においやられた。遺児となったエミリーは、オーギュストの後楯を得て成長し、現在皇帝の宮廷で恵まれた地位にある。しかし、心の底では恨みを忘れていない。父の仇を討つことこそ、彼女にとって何物にも優先する。ローマの平和や恋人シンナへの愛さえ、それに較べれば二次的な意義しか持たない。従って彼女は、皇帝暗殺の陰謀にシンナをひきこんだ上、オーギュストの命と引き換えでなければ、彼の愛に応じようとしなない。

Quoique j'aime Cinna, quoique mon cœur l'adore, / S'il me veut posséder, Auguste doit périr, / Sa tête est le seul prix dont il peut

m'acquérir,⁵⁾

(私がいかにシンナを愛し、恋慕していようと、シンナが私を自分のものにしたいのなら、オーギュストが死なねばなりません。彼の命が、シンナが私を手に入れることのできる唯一の代価なのです。)

さて、このように女性を、他人を制して、言わば、闘争の結果獲得される対象として捉える傾向が、スタロピンスキーの指摘する如く、「内気な男性」に共通するものかどうか、今は問わないことにしよう。17世紀のコルネイユのひととなりについて、我々が知り得る伝記的事実はきわめて少なく、たとえば劇作家の内向的性格を暗示すると思われる甥のフォントネルの証言などはあっても、最終的な結論に至るには、資料不足の印象をぬぐえない。

Il était mélancolique; il lui fallait des sujets plus solides pour espérer et pour se réjouir que pour se chagriner ou pour craindre.⁶⁾

(彼は不安におちいり易い性質だった。彼が希望を抱いたり、喜んだりするには、くよくよしたり心配したりするより、はるかに確固たる原因を必要とした。)

ただ、このように闘争的対人関係を伴うもの、ないしはその結果として男女の愛を捉える現象は、様々な武勲、試練を経て初めて憧れの女性と結ばれる中世騎士道文学などにも見られる通り、人類普遍の夢の表現であると同時に、ある程度まで男女関係の現実を反映したものと考えるべきではなかろうか。

そして、愛もまた、厳しい競争原理を免れず、最終的には判定者たる女性のかかなり気紛れな審判に欲望の成就が左右されるとなれば、敗者となり得る男性にとって、そこから強いフラストレーションが発生することは想像に難くない。さらに、それが補償行為として、過剰なストレスを避けながら充足されない本能を慰撫する人生哲学のようなものを生み出すことも、人間社会の様々な事例からして、容易に想像できる。

コルネイユ劇の愛情心理の分析に移る前に、先ずこのような男女関係とフラストレーションについての初歩的な心理学を念頭に置いておきたい。

(2)

1632年に悲喜劇『クリタンドル』と共に出版されたコルネイユの詩集《Mélanges poétiques》の冒頭の詩『D. L. T. 氏へ捧ぐ』には、情念の苦悩から解き放たれ、心の平安を得て初めて幸せになれるというストア的思想が表明されている。

L'expérience indubitable / Me fait tenir pour véritable / Que l'on commence d'être heureux / Quand on cesse d'être amoureux. / Lorsque notre âme s'est purgée / De cette sottise enragée / Dont le fantasque mouvement / Bricole notre entendement, / Crois-moi qu'un homme de ta sorte / Libre des soucis qu'elle apporte / Ne voit plus loger avec lui / Le soin, le chagrin, ni l'ennui. / (. . . .) Je meure, ami, c'est un grand charme / D'être insusceptible d'alarme, / De n'espérer ni craindre rien, / De se plaire en tout entretien, / D'être maître de ses pensées.⁷⁾

(明々白々たる体験のおかげで、私には真実が分った。人は恋するのを止める時幸福になり始めるのだと。気紛れな心の動きが判断力を狂わせる、この狂気じみた愚行から解放されたなら、私の言葉を信じなさい、貴方のような男性は恋の気遣いともおさらばし、もはや気苦労とか悲しみとか絶望にとりつかれることがなくなるのだ。(……) 友よ、誓って言おう。不安に悩まされず、何も期待せず何も恐れず、あらゆる会話を楽しみ、自分の考えを自分でコントロールできるということは、実に素晴らしいことではないか。)

『D. L. T. 氏へ捧ぐ』に述べられている思想信条が、1637年に出版された喜劇『ロワイヤル広場』の献辞中で作者が表明し、かつ喜劇の風変りな主人公アリドールの信念でもある、

on ne doit jamais aimer en un point qu'on ne puisse n'aimer pas;⁸⁾
(愛さないことが不可能になるほど愛すべきではない。)

という恋愛哲学に直結することは言うまでもない。アリドールは恋人アン

ジェリックを、己れの哲学に反して、愛し過ぎていると考えた。

Je veux que l'on soit libre au milieu de ses fers. / (……) Pour vivre de la sorte Angélique est trop belle,⁹⁾

(私は、恋の鎖につながれようとも自由であることを欲する。(……) そんな風に生きるには、アンジェリックは美し過ぎる。)

そして、自由の妨げとなる彼女との結婚を避けるため、偶々アンジェリックを慕っていると分ったクレアンドルと彼女を結びつけようと、奔走する。

だが、コルネイユ悲劇解釈の鍵を握ると言われ、彼が創造した最も興味深い人物の一人であるアリドールの例を持ち出すまでもなく、既に劇作家の処女作において、恋愛と結婚に敵意を示す若者が登場する。『メリット』のティルシスである。

劇の冒頭で、メリットの美貌に魅了され真剣に結婚を考慮する友人エラストに対し、ティルシスはリベルタン風の嘲罵、冷笑を雨あられと投げつける。少々長くなるが、彼の台詞を引用する。

Ces visages d'éclat sont bons à cajoler, / C'est là qu'un jeune oiseau doit s'apprendre à parler, / (……) Tous ces discours de livre alors sont de saison, / Il faut feindre du mal, demander guérison, / (……) Jurer qu'on brisera toutes sortes d'obstacles, / Mais du vent et cela doivent être tout un.¹⁰⁾

(これら際立った美貌の人なら、言い寄るのに適当な相手だし、くちばしの青い若者が口説き方を学ぶ格好の場になる。(……) その際には、ありとあらゆる小説風の文句が大流行だから、恋の病に憑かれた振りをして、何とか病をいやして頂けないかとお願ひし、(……) どんなかん難辛苦ものり越えますと誓う訳だ。しかし、こうした真似ほど軽々しくて、あてにならぬものはない。)

(……) bien qu'une beauté mérite qu'on l'adore, / Pour en perdre le goût on n'a qu'à l'épouser. / Un bien qui nous est dû se fait si peu priser, / Qu'une femme fût-elle entre toutes choisie, / On en voit en six mois passer la fantaisie,¹¹⁾

(美女が恋焦がれるに値するとしても、彼女に執着を覚えなくなるには、結婚するだけで十分だ。宝物も自分のものになってしまえば、値うちを無くすから、数多い女性の中からたった一人選ばれたとはいえ、彼女への束の間の恋は半年もすれば醒めてしまう。)

おまけに、浮気っばい美人を妻にしたら、苦勞だけはいつまでも続く。配偶者選びは難しい。

(……) ce choix difficile / Assez et trop souvent trompe le plus habile, / Et l'Hymen de soi-même est un si lourd fardeau / Qu'il faut l'appréhender à l'égal du tombeau. / S'attacher pour jamais au côté d'une femme! / Perdre pour des enfants le repos de son âme, / (……) Ah! qu'on aime ce joug avec peu de raison!¹²⁾

(この厄介な選択は、最も目の利く人をさえ、かなりあるいは余りにも頻繁に誤らせる。結婚は本来大変な重荷なのだから、墓場と同じほど恐れねばならない。一人の女の側に永久に縛りつけられて、子供達のために心の平安を無くしてしまう! (……) あー! こうした束縛を好むとは、何と理屈に合わぬことか!)

では、ティルシスにとって唯一有意義な結婚とは何か。持参金のたっぷりついた財産家の娘と結ばれることである。

(……) ne pense pas que j'épouse un visage, / (……) Son revenu chez moi tiendrait lieu de mérite: / (……) l'abondance des biens / Pour l'amour conjugal a de puissants liens; / (……) C'est assez qu'une femme ait un peu d'entregent, / La laideur est trop belle étant teinte en argent.¹³⁾

(私が顔の美醜で結婚すると考えないでくれ。(……) 彼女のもたらす収入が、私にあっては美しさの代りをする。(……) 豊かな富は、夫婦愛の強力な絆だ。(……) 妻となる人は、人前に出て恥ずかしくないマナーを心得ていれば十分だ。醜さも、金銀で塗りたくれば、美し過ぎるほどになる。)

もっとも、ティルシスのシニカルな女性観、結婚観を額面通りに受け取る必要はなかろう。この後エラストにメリットを紹介されたティルシスは、開陳したばかりの処生哲学を即座に放棄し、友人の恋人に一目惚れしてしまう。美しい女性に言い寄る若者達の軽薄さを皮肉った彼の哲学もまた、その若者達に負けず劣らず、気紛れであてにならぬものであった。移り気は青春のしるしであり、結婚前の若者の揺れ動く心をそのまま反映しているのだろうか。要するに、いつの時代にも結婚を恐れる若者達は存在するのであって、だからと言って彼らが本当に結婚を望んでいないかと言うと、そうではない。信頼に値する、望ましい配偶者にめぐり会えるか、幸福な結婚生活を維持できるかという不安感に深くさいなまれているだけで、こうした不安感が一時でも払拭されれば、彼らは正反対の方向に走り出す。

ティルシスの一見陽気で軽薄な結婚観の中にも、深刻な現実の一端に触れるものがある。たとえば、引用の最後で彼が口にする婚姻と財産の関係。そもそも『メリット』は作者の実体験がある程度投影された作品と考えられる。フォントネルは、コルネイユの処女作について、次のように説明している。

Un jeune homme de ses amis, amoureux d'une demoiselle de la même ville, le mena chez elle. Le nouveau venu se rendit plus agréable que l'introduit. Le plaisir de cette aventure excita dans Corneille un talent qu'il ne connaissait pas; et sur ce léger sujet il fit la comédie de *Mélite*,¹⁴⁾

(同郷の令嬢に恋していた友人の若者が、彼女の家にコルネイユを連れて行った。新しい来訪者の方が、紹介者より愛情を勝ち得た。この恋の冒険の喜びが、コルネイユの内に、彼が自覚していなかった才能を目覚めさせた。そして、この軽妙なテーマを基に、彼は『メリット』という喜劇を作った。)

さて、ハッピー・エンドで終る喜劇では、ティルシスは身分も財産も自分より恵まれたエラストを制して、メリットと結ばれる。しかし、クートンなどの研究によれば、コルネイユと彼の現実の恋人カトリーヌ・ユーの間では、事はそう好都合に運ばなかった。¹⁵⁾『メリット』が上演されて数年後、二人は別離を迎える。その原因は、ユーの婚約者とコルネイユの財力

の差にあったようだ。コルネイユの悲劇にあって、女性を魅惑して止まないものは勇者の武勲と栄光だが、現実の市民社会で、その役割を果たすものがあるとしたら、まさしく富の威力であろう。

ケートンは、『メリット』の自伝的性格に言及した後、次のようにコメントしている。

En fait *Méliste* est le reflet d'une expérience à la fois double et unique: l'expérience sentimentale de la méfiance, des inquiétudes devant l'amour, puis de l'illumination amoureuse; l'expérience sociale du conflit entre les aspirations des cœurs et la réalité de l'argent. Les comédies ultérieures vont toutes s'organiser autour de ces deux pôles: l'amour et l'argent. Plus tard, les «comédies héroïques», ainsi *Pulchérie*, voire les tragédies fondées sur les conflits ou les accommodements de l'amour et de l'ambition, ne feront en un sens que transposer le conflit qui était au centre de *Méliste*.¹⁶⁾

(実際には『メリット』は、二つの、だが単一でもある或る体験を反映したものである。一つは愛を前にしての不信、不安と、それに続く愛の啓示という感情体験。もう一つは、人々の願いと金銭の現実との間の葛藤に係る社会的体験である。これ以降の喜劇はすべて、愛と金銭というこの二つの極をめぐって構成される。もっと後の『プウルケリ』のような「英雄喜劇」、さらには愛と野心の葛藤もしくは妥協に基づく悲劇も、ある意味で『メリット』の根幹にある葛藤を移し替えたにすぎないであろう。)

従って、先に触れた『ロワイヤル広場』のアリドールの解釈も、『メリット』の延長線上に位置づけるのが正しいだろう。確かに、ダンディズムのかおりがするアリドールの恋愛哲学は、家族や愛情の絆を切り捨てた、飽くなき自由の追求という意味で、現代人の興味を強くかき立てるかも知れない。だが、本質的にそれは、結婚恐怖症の若者の不安心理をペダンチックに表現したものにすぎぬのである。この点で彼は、ティルシスの精神的双生児と言えよう。その証拠にアリドールもまた、劇の進行と共に、金科玉条とする恋愛哲学の存在を忘れてしまう。そして、最終幕では、繰返される裏切、侮辱にもかかわらず、アンジェリックが彼を愛し続けている

と知って、逆に彼女への愛を再確認する。

Plus je t'étais ingrat, plus tu me chérissais, / Et ton ardeur croissait
plus je te trahissais. / (……) La honte et le remords rallumèrent ma
flamme.¹⁷⁾

(私が恩知らずになればなるほど、あなたは私をいとおしんでくれた。裏切れば裏切るほど、あなたの情熱は高まった。(……) 恥ずかしさと後悔の念に駆られながら、私の恋は再び燃え上った。)

つまり、当然のことながら、ティルシス同様彼の恋愛哲学も、異性を求める本能まで消滅させることはできなかった。この本能は、主人公の意識と裏腹に、己れの望みを実現できる機会を辛抱強く窺っている。そして、主人公の哲学が課した妨害、試練を利用して、恋人達の愛を再確認し、最後に勝利の叫びを上げるのである。もっとも皮肉なことに、アリドールが結婚を決意した土壇場で、アンジェリックの方は、恋人に与えられた余りの屈辱に耐えられなくなり、彼を捨てて修道院に入ってしまうのだが……

アリドールとティルシスの間に、明らかな相違も存在する。ティルシスはメリットに会ったとたん、自分の人生訓を忘れざるのに、アリドールは、アンジェリックとの愛に疑いを差しはさむ余地がなくなった時、突然己れの哲学を実践に移そうとするからだ。そこから、後年のコルネイユ悲劇に通ずる独特の雰囲気が生れる。自己の内に根ざした恋人や家族への深い情愛を、ほとんど暴虐の限りを尽くして踏みにじり、理性が掲げた目標を達成するために、意志が感情に犠牲を強いる。コルネイユ悲劇の「意志的な」主人公達が実行することを、アリドールが予行演習してみせるのである。アリドールの行為は、クートンの表現を借りるなら、「サド＝マゾヒスト的」とでも形容すべきものであろうか。¹⁸⁾最愛の女性を、彼女の意志を無視して一このもののように他の男に引き渡そうとする行いは、アンジェリックに対する残酷きわまりない侮辱であると同時に、今なお主人公が心中彼女を愛しているとしたら、自虐そのものと言えるであろう。しかし、こうしたアリドールの不思議な酷薄さが、愛にまつわる彼の不安感に基因していることは否定できない。

(3)

我々は2章で、コルネイユの初期喜劇において、恋愛と結婚に敵対的なイデオロギーを持つ若者が、結局愛の本能に屈する様を分析してきた。この結果は当然予想された事態であって、彼らのイデオロギーは、根本的には内気な若者の愛の不安、自分は女性に愛され得るか、愛される資格があるか、女性を満足させることができるかという不安から生れたと、考えられるからである。この不安から生じるストレスに抗するため、愛の放棄をうたったイデオロギーに彼らはひきよせられるが、本能は彼らの抵抗以上に根強いものであった。

ところで、この愛の希求と反抗は、コルネイユの初期喜劇だけに見られる現象であろうか。初版本で悲喜劇とされていた『ル・シッド』を含めて、所謂彼の傑作悲劇は、それと無縁なところで成立しているのか。以下我々は、『ル・シッド』と『ポリュクト』を取り上げながら、初期喜劇と同様の傾向、つまり不安に震えながら女性の愛を確認しようとする激しい衝動が、主人公達の行動の背後に潜んでいることを明らかにしたい。なお、両作品については別のところで詳しく分析したので、ここでは要点を述べるに留める。¹⁹⁾

先の引用2)で、ロドリグはシメーヌに向って、彼女の父ドン・ゴメスとの決闘に走ったのは、そうしなければ卑怯者となって彼女の愛にふさわしくなくなるからだと言っている。あたかも決闘が、彼女への愛に忠実であるが故に行われたかのような口振りである。これは、確かに理屈としては間違っていないかも知れないが、主人公が決闘を決意した際の推移を正確に伝えていない。決断はロドリグが父親ドン・ディエグの名譽をシメーヌへの思慕の念より優先させるという明白な価値判断に基づいて、行われたからだ。

Oui, mon esprit s'était déçu, / Dois-je pas à mon père avant qu'à ma maîtresse?²⁰⁾

(そうだ、私の考えは間違っていた。恋人より前に父に恩義を尽すべきではないか。)

では、主人公のこのような錯覚はどうして生れたか。決闘が終ってシメー

ヌの部屋に侵入したロドリゲスが、彼女の愛をつなぎとめておきたいという、恐らく無意識の衝動に駆られて、事態を美化して物語ったという以外に、理由は考えられない。

愛の確証を得たいとする欲求は、この後も強く恋する若者の心を捉えていたようだ。同じ三幕四場で、ドン・ゴメスを倒した剣をシメーヌにさし出しながら、自分を殺してくれと迫る。この文字通り芝居がかった場面は、劇として見れば美しさを欠いてはいないが、現実にはひき戻して考えれば、受け入れ難い不自然さを含んでいる。良家の娘であるシメーヌが、いかに父の敵かたきとは言え、愛する青年を、その青年がさし出した父親の血潮にまみれた剣で、しかも父親の遺体の安置された同じ邸の中で、殺害するなどというグロテスクなシーンは、到底想像できないだろう。この点に関する限り、「ル・シッド論争」の際コルネイユを批判したスキュデリーヤやシャプランの見解は、常識に適った正論と言える。

les filles bien nées n'usurpent jamais l'office des bourreaux;²¹⁾

(育ちの良いお嬢さん方が首切り役人の代役を務めるなどということは、絶対に起こり得ない。)

C'était montrer évidemment qu'il ne voulait pas mourir, de prendre un si mauvais expédient pour mourir,²²⁾

(ロドリゲスが死ぬためにこんなにも拙劣な方法を選んだのは、彼が実は死ぬ積りのなかったことを明白に示している。)

では、シメーヌの手にかかって果てる場面など本心想像していないように見える主人公が、執拗に殺してくれと迫ることで、どんな結果が生じたか。シメーヌの告白、つまり父親の敵かたきであるにもかかわらず、ロドリゲスを憎むことができない、彼が身の安全を守り、自分が復讐の義務を果たせず終ることこそ彼女の願いだという、言わばシメーヌの愛の告白を引き出すことに成功するのである。

Va, je ne te hais point.²³⁾

(そう、私は少しも貴方を憎んでいません。)

Mon unique souhait est de ne rien pouvoir.²⁴⁾

(私の唯一の願いは何もできないことです。)

これを聞いて、ロドリゲは一瞬喜びの叫びを発する。

Ô miracle d'amour!²⁵⁾

(おー、何という愛の奇跡!)

それは、己れの弱さ、義務に反する欲望を認めざるを得なかったシメヌの屈辱感と、ある意味で対照をなす。

Mais comble de misères.²⁵⁾

(しかし、何という不幸の極み。)

全く同じシーンが五幕一場でも繰返される。シメヌの代理戦士ドン・サンシュと決闘することになった主人公は、彼女が復讐の義務を果たせるよう、またまた戦わずしてドン・サンシュにうたれると言い出す。命を大切にしよう求めるシメヌとの間で押し問答が続いた挙句、引用4)で見た通り、ロドリゲは彼女から決定的な愛の証を得る。

Pour forcer mon devoir, pour m'imposer silence, / Et, si jamais l'amour échauffa tes esprits, / Sors vainqueur d'un combat dont Chimène est le prix.²⁶⁾

(私の義務の遂行を不可能にし、私に沈黙を課すために、もし恋が貴方の心を一度でも熱くしたことがあるのなら、シメヌが賭けられているこの勝負に、勝ってお戻り下さい。)

そして、三幕四場と同様、この台詞を口にしたシメヌは強い羞恥心に捉われるのに、一方のロドリゲは勇気百倍、喜び勇んで決闘に臨む。

Adieu, ce mot lâché me fait rougir de honte. / Est-il quelque ennemi qu'à présent je ne dompte?²⁷⁾

(お別れです。こんなことを口にして、恥ずかしさで真っ赤になりそ

うです。—今となっては、この私に倒せぬ敵などいようか。)

ところで、最終的にロドリグはシメーヌと結ばれるのであろうか。スペインに伝わる「ル・シッド」伝説では二人は結婚する。しかし、悲喜劇の最後に彼女が発する台詞は、彼女とロドリグを引き裂く深淵を暗示しているようだ。

Sire, quelle apparence à ce triste Hyménée, / Qu'un même jour commence et finisse mon deuil, / Mette en mon lit Rodrigue, et mon père au cercueil? / (……) Vers ses Mânes sacrés c'est me rendre perfide, / Et souiller mon honneur d'un reproche éternel, / D'avoir trempé mes mains dans le sang paternel.²⁸⁾

(陛下、一日のうちに私の喪が始まって明け、新床にはロドリグを柩には父を迎えるというのでは、この悲しい婚礼に道理がたちましようか。(……) それは聖なる父の霊を裏切ることです。そして父の血潮に娘の手を浸したと永久に非難され、名誉を失うことになるのです。)

もともとシメーヌは、恋を犠牲にして名誉を競い合う一種のゲームにおいて、ロドリグに較べ不利な立場に立たされている。ロドリグは、シメーヌの父を倒して名誉を守った後も、シメーヌが名誉を捨てて彼の妻になる決心をすれば、名誉も恋も共に手に入れることができる。だが、シメーヌにとって名誉を守るとは、即ロドリグの命を断つことだから、彼女にはどうあがいてみても名誉と恋の両方を得る可能性はない。コルネイユの劇は前者のケース、つまり女性の譲歩によってハッピー・エンドを迎えるかに見えるが、先ほどの引用にある通り、シメーヌの心の傷は、それほど容易にいやされるものではなさそうだ。

そもそも、父親殺しの犯人と被害者の娘の結婚というテーマは、ベニシュの言い方に従えば、

La femme est le lot du vainqueur et, jusqu'à un certain point, accepte de l'être.²⁹⁾

(女性が征服者の戦利品であり、女性もある程度までそれを受け入れ

た)

古代や中世初期の蛮習を思わせる。近代的自意識の持主にとって、それは悪夢に他ならない。

娘が、仮に以前からその若者を慕っており、彼の勇敢さを知ってますます心ひかれたとしても、力づくの戦利品のように父親殺しの犯人と結ばれるのでは、彼女の誇りに反する。言い換えれば、不安におののくロドリグがいかにも心弾ませてシメヌの愛を確認し、彼女を魅惑して止まぬ自分の力を誇らしく思ったとしても、最後の瞬間にシメヌは彼の手からすり抜けていく。それは『ロワイヤル広場』の主人公が、さんざんアンジェリックを傷つけ、それでも変らぬ恋人の愛に感激し、遂に結婚を決意した瞬間、アンジェリックをとり逃してしまうのに似ている。『ル・シッド』は悪夢、美しい悪夢である。

※ ※ ※

『ポリュークト』は、ローマ帝国時代のキリスト教徒の殉教を扱った宗教悲劇である。従って、劇中禁欲こそ主人公によって称賛される美徳であり、そうした作品に愛の探求という世俗的テーマを見い出そうとするのは、矛盾と映るかも知れない。ただ、18世紀まで『ポリュークト』は専ら異教徒セヴェールとポーリーヌの恋愛劇として鑑賞された。フォントネルやヴォルテールの証言は、17世紀前半の代表的サロンであるランブイエ館で、『ポリュークト』がキリスト教を題材とした作品であるが故に、好感をもって迎えられなかったことを示している。³⁰⁾ 主人公のキリスト教精神に感嘆の目が向けられるのは、19世紀のシャトーブリアンあたりかららしい。しかも、この悲劇が真にキリスト教精神を体現したものかどうかは、今日まで意見が別れる。

ピエール・ルイスは『ポリュークト』の主人公を、「フランス悲劇の中でも最も生彩を放ち続ける」人物と評した後、³¹⁾ どうして主人公がこんなに強く我々の心を動かすことができるのか問うている。その際は、ポリュークトのキリスト教は「シンボリックなもの、つまり観念上のもの」にすぎず、³¹⁾

Ce n'est pas ici le lieu de supputer sa valeur théologique. Nous savons qu'en 1643 elle était à peu près nulle, et cela suffit.³¹⁾

(ここは、その神学的価値を値踏みする場ではない。ただ我々は、1643年にそれがほとんど無価値であったことを知っており、それで十分だ。)

と述べて、感動の理由から除いている。

確かにコルネイユが日常生活において敬虔なキリスト教徒であり、『ポリュークト』がモリーナ主義に厳密に則った作品であることは否定できないだろう。事実、

Il a eu souvent besoin d'être rassuré par des casuistes sur ses pièces de théâtre.³²⁾

(コルネイユは、自分の劇作品について、たびたびカジュイスト [= 決疑論者] に不安を取り除いてもらわねばならなかった)

ようである。しかし、彼が多分信仰からの逸脱を非難されるのを恐れて、後年悲劇から削除した一節は、奇しくも作者が狂信からほど遠い、柔軟な思考と教養の持主であったことを教えてくれる。

Peut-être qu'après tout ces croyances publiques / Ne sont qu'inventions de sages politiques, / Pour contenir un peuple ou bien pour l'émouvoir, / Et dessus sa faiblesse affermir leur pouvoir.³³⁾

(多分、結局のところこうした民衆の信仰は、賢い政治家達が民衆を鎮めたり扇動したりするため、そして民衆の判断力の欠如を利用して自分達の権力を確立するために、作り出したものにすぎない。)

セヴェールがここで話題にしているのは、皇帝神格化などの古代ローマの宗教である。だが、このような観点は、ヴォルテールなど18世紀の啓蒙思想家を思わすところがあり、あらゆる宗教の存立基盤を揺るがす可能性を持っていた。従って、詩行の削除は、ルーコヴィチの言う通り、自由思想家の仲間とみなされるのを作者が恐れた結果と考えて、間違いなからう。³⁴⁾

また、1639年に出版されたノーデの著書《Considérations politiques sur les coups d'État》に、セヴェールの台詞に共通する思想が述べられてい

ることから、クートンの指摘する如く、コルネイユがこの自由思想家の作品に目を通していても十分考えられる。³⁵⁾

こうした諸々の事情を考慮すると、『ポリュエクト』が作者の熱烈な信仰心を吐露する目的で書かれたとか、主人公の純粋な殉教精神が劇的感動を生み出す最大の要因だなどと言うのは、かなり皮相な見解とみなさざるを得ない。そこで、ピエール・ルイスのように、主人公の信仰を「シンボリックなもの」と考えれば、この悲劇はどのように姿を変えるか。

主人公がキリスト者でなかったとしても、社会の既成秩序に反逆する革命家であることに変わりない。もっとも、ポリュエクトを革命家に見立てるやり方は、決して目新しい現象ではない。アンドレ・ジッドも19世紀のジュール・ルメートルも、こうした着想に魅力を感じている。ルメートルは、ポリュエクトをイタリアの炭焼き党員にたとえた。³⁶⁾ 我々の世代なら、さしずめ60年代後半の大学紛争を思い起こしても良いだろう。このように、必ずしも「偉大な」という形容詞が似つかわしくない小革命家まで含めて、革命家が先ず第一に直面するのは、肉親・家族との相剋であろう。既成秩序の枠内に生きる集団と、その集団の中から生れた異端者の間で、さまざまの愛憎劇が演じられる。ポリュエクトの場合もそうであった。主人公と新妻ポーリーヌ、主人公と義父フェリックスの対立。しかも、ここにかけてポーリーヌと相思相愛の仲であり、今や皇帝の寵臣として絶大な権力を誇るセヴェールが加わることによって、対立は複雑な様相を呈することになる。

ところで、ポリュエクトと『ロワイヤル広場』のアリドールの間には、奇妙な類似が存在する。アリドールが情熱的な恋愛の否定につながる人生訓を奉じていたように、ポリュエクトも神への愛を実現する最大の障害は、現世での官能の喜びであり、具体的にはポーリーヌへの愛だと信じている。

Source délicieuse en misères féconde, / Que voulez-vous de moi, flatteuses voluptés? / Honteux attachements de la chair et du Monde, / Que ne me quittez-vous quand je vous ai quittés?³⁷⁾

(悲惨さの甘美なる源、人を欺く官能の喜びよ、お前は私に何を期待しているのだ? 肉と現世への恥ずべき愛着よ、私がお前を捨て去ったのに、どうしてお前は私の許を離れぬのか?)

Je porte en un cœur tout Chrétien / Une flamme toute divine, / Et je ne regarde Pauline / Que comme un obstacle à mon bien.³⁸⁾

(キリスト教徒の私の心には、神への愛の炎が燃えている。だから私の目にポーリーヌは、至福に至る妨げとしか映らない。)

かくして信仰に生きるポリュクトは、妻に、自分の死後かっの恋人セヴェールと再婚するよう命じる。『ロワイヤル広場』の主人公を彷彿とさせる行為である。もちろん、シメヌの名誉を守るため命を捨てようとしたロドリグと同様、ポリュクトの行いも、外見上は愛する人を慮った犠牲精神の完璧な表現と考えられよう。しかし、ポーリーヌには必ずしもそうとは思えなかった。彼女が味わった屈辱は、『ロワイヤル広場』のアンジェリックと同じく、愛する男性から一このもののように他の男に引き渡される屈辱であったのか。そして、彼女がそんな恥辱を耐えねばならぬのも、結婚前にセヴェールを愛していたことと関係があるのではないか。

Que t'ai-je fait, cruel, pour être ainsi traitée, / Et pour me reprocher au mépris de ma foi / Un amour si puissant que j'ai vaincu pour toi?³⁹⁾

(酷い人、私が貴方に何をしたからといって、こんな扱いを受けるのですか？ 貴方のために思い切ったあの激しい恋のことを、私が貞節を守っているのに、今なお責めるのはどうしてですか？)

ポーリーヌは激しく夫に抗議する。夫の答は明快である。

Vivez avec Sévère, ou mourez avec moi.⁴⁰⁾

(セヴェールと共に暮らすが良い。さもなければ私と一緒に死になさい。)

セヴェールか夫かの二者択一を迫られて、ポーリーヌにもはや迷うところはない。夫の処刑に立ち会った後、突然彼女はキリスト教徒に改宗し、夫の後を追う。

さて、体制・秩序への反逆者、一種の革命家であるポリュクトの胸中に、妻の愛を確認したいという不安な衝動がうごめいていたのか。彼女をかっの恋人に引き渡し、彼と自分との間の選択を求める時、主人公の心

は期待と不安で焦ら立っていたのか。そして、ポリュクトの唱える禁欲の教えは、アリドールの恋愛哲学と同様、愛する女性へ試練を課す口実として使われた後は、劇中でその実質的な役割を終えてしまうのか。率直に言って、『ポリュクト』の劇に、こうした主人公の心の底まで確かめる手だては残されていない。しかし、主人公が一種サディスチックとも言える苛酷な試練を女性に課して、愛を確認するという構図は、『ロワイヤル広場』や『ル・シッド』と驚くほど共通している。

この二作と『ポリュクト』が大きく異なるのは、後者では、結末において主人公が完全な愛の勝利を得る点であろう。ポーリーヌは死を賭して、夫と同じ理想・信仰を選ぶ。『ロワイヤル広場』はもちろん、おそらく『ル・シッド』の主人公も最終的に手に入れることのできなかった女性の愛を、ポリュクトは掌中に収める。しかも彼は、ロドリグのように輝かしい武勲によって女性を魅惑する英雄ではない。侍女ストラトニスの罵声が表示す如く、既成の秩序からすれば社会的名誉を失った敗残者、裏切者である。

C'est l'ennemi commun de l'État et des Dieux, / Un méchant, un infâme,
(……) / Une peste exécration à tous les gens de bien, / Un sacrilège
impie, en un mot un Chrétien.⁴¹⁾

(彼は国家と神々の共通の敵です。悪党、破廉恥漢、(……) 清廉潔白なすべての人にとっておぞましいペストの如き存在、不敬な冒瀆者、一言で言えば、キリスト教徒なのです。)

女性の愛を得るために、主人公達が厳しい競争原理にさらされるコルネイユ劇において、あらゆる社会的価値を奪われたポリュクトへの妻の愛は、何と安らぎに満ちたものであろうか。富や権勢や、武勇によって象徴される力と無縁なところで成立する愛。コルネイユ劇の主人公が、異性愛を否定する哲学を掲げた時、実は無意識のうちに探し求めているのはそうした愛ではなかったか。

ポーリーヌを創造するにあたって、作者の体験が重要な意味を持つであろう。『ポリュクト』初演の2年ほど前、コルネイユ34才の頃に、彼は長かった、そしておそらくは不安を秘めた青春に別れを告げて結婚生活に入る。その生活の中で、彼のうちに潜在的にあった栄光に輝く強者を好む

冷酷な審判者という女性のイメージが、ある程度影を潜めたのではないか。『ポリュークト』の胸打つ夫婦愛は、作者が得たそのような心の安らぎなくしては、決して創造されなかったであろう。

『ポリュークト』以降、『ル・シッド』や『ポリュークト』に描かれた、あの微妙で生彩ある愛の描写に匹敵するものは、コルネイユの作品に二度と現れない。作者を愛の探求に向かわせたものが、何より青春の不安であったとすれば、結婚生活の幸せが、皮肉にもこの種の創作モチーフを作者から奪ってしまったと考えられよう。

【註】

拙論中のコルネイユの作品からの引用は、次の出典による。

Corneille (Pierre), *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, Gallimard, 1980.

- 1) Starobinski (Jean), 《Stendhal pseudonyme》, *L'Œil vivant*, Gallimard, 1961, p. 213.
- 2) *Le Cid*, III, 4, 896-900.
- 3) *Ibid.*, IV, 2, 1175-1176.
- 4) *Ibid.*, V, 1, 1566.
- 5) *Cinna*, I, 2, 54-56.
- 6) Fontenelle, 《Vie de Corneille》, *Œuvres complètes de Corneille*, Ed. A. Stegmann, Seuil, 1963, p. 25.
- 7) Corneille, *op. cit.*, pp. 175-176.
- 8) *Ibid.*, p. 469.
- 9) *La Place Royale ou l'Amoureux extravagant*, I, 4, 212, 221.
- 10) *Mélite ou les Fausses Letters*, I, 1, 59-60, 63-64, 66-67.
- 11) *Ibid.*, 82-86.
- 12) *Ibid.*, 97-102, 104.
- 13) *Ibid.*, 110, 114, 115-116, 123-124.
- 14) Fontenelle, *op. cit.*, p. 21.
- 15) Cf. Couton (Georges), 《La clef de Mélite》, *Réalisme de Corneille*, Les Belles Lettres, 1953.
- 16) *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, p. 1154.
- 17) *La Place Royale ou l'Amoureux extravagant*, V, 3, 1356-1357, 1359.
- 18) Cf. *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, p. 1352.

- 19) Cf. 拙論, “《Le Cid》について”, 『広島大学総合科学部紀要V』, v. 7, 1981.
拙論, “L'Amour conjugal dans *Polyeucte*”, 『広島大学総合科学部紀要V』, v. 17, 1991. 拙論, “ポーリーヌの使命感”, 『フランス文学』, v. 19, 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部, 1992.
- 20) *Le Cid*, I, 7, 343-344.
- 21) *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, p. 789.
- 22) *Ibid.*, p. 815.
- 23) *Le Cid*, III, 4, 973.
- 24) *Ibid.*, 994.
- 25) *Ibid.*, 995.
- 26) *Ibid.*, V, 1, 1564-1566.
- 27) *Ibid.*, 1567-1568.
- 28) *Ibid.*, V, 7, 1832-1834, 1836-1838.
- 29) Bénichou (Paul), *L'Écrivain et ses travaux*, José Corti, 1967, p. 186.
- 30) Cf. Fontenelle, *op. cit.*, p. 23. Voltaire, *Commentaires sur Corneille. Œuvres complètes de Voltaire*, Ed. L. Moland, Kraus Reprint, 1967, t. 31, p. 394.
- 31) Louÿs (Pierre), *Œuvres complètes de Pierre Louÿs*, Slatkine Reprints, 1973, t. 10, p. 45.
- 32) Fontenelle, *op. cit.*, p. 25.
- 33) *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, p. 1676.
- 34) Cf. Loukovitch (Kosta), *L'Évolution de la tragédie religieuse classique en France*, Droz, 1933, p. 256.
- 35) Cf. *Œuvres complètes de Corneille I*, Ed. G. Couton, pp. 1675-1676.
- 36) Cf. Lemaitre (Jules), *Impressions de théâtre*, Boivin & C^{ie}, 3^e série, année 1888, p. 76.
- 37) *Polyeucte martyr*, IV, 2, 1105-1108.
- 38) *Ibid.*, 1141-1144.
- 39) *Ibid.*, V, 3, 1592-1594.
- 40) *Ibid.*, 1609.
- 41) *Ibid.*, III, 2, 780-781, 783-784.